自己関連情報の文化的バイアス

文化神経科学からの検討

○上窪綾¹・唐澤真弓²

(¹東京女子大学大学院人間科学研究科・²東京女子大学現代教養学部)

キーワード: 自己バイアス、文化差、事象関連電位

A study of Cultural differences in self-relevant information-Cultural Neuroscience Approach

Aya KAMIKUBO¹, and Mayumi KARASAWA^{2,*}

(¹Graduate School of Human Science, Tokyo Woman's Christian University, ² Tokyo Woman's Christian University)

Key Words: Self bias, Cultural differences, Event-Related Potential

目 的

近年の文化心理学研究では、自己認識の文化的多様性が明らかにされてきた (Markus & Kitayama, 1991)。自己認識の文化的バイアスについて、アメリカ人に比べ日本人は総じて自尊心が低いことが示され (e.g. Heine & Lehman, 1995; Bond & Smith, 1995)、同様の自己評価のバイアスは、自己記述 (e.g., Cousins, 1987; Markus, Kitayama, & Mullaney, 1997) 自他の評価の判断 (唐澤, 1998)、自他の課題の成績の評価 (Matsumoto & Kitayama, 1999)、成功と失敗の原因帰属 (北山・高木・松本, 1995)、成功や失敗のフィードバックの受け入れの度合い (Heine et al., 1999; 高田, 1987) など、多くの指標によって明らかにされてきている。総じて、アメリカ人は正の自己関連情報に大きなウェイトをおくため自己高揚の傾向を示し、日本人は負の自己関連情報にウェイトをおくため自己批判的傾向を示すことが報告されてきた。しかしながら、これらの結果は、セルフレポートに基づくものであった。本研究では、事象関連電位を用いて、これまでの文化心理学研究でみられたような、日本人の自己批判的傾向が、脳の情報処理の過程においてみられるかを検討する。

本研究では、自己関連情報評価の感情価によって、その処理の性質が情報処理の初期から系統的に異なるかを検討する。脳機能を調べるための電気生理研究では、近年さまざまな解析手段が進歩しているが、ここでは複数の神経細胞の電気活動が合流した電位として頭皮上から測定でき、特定の刺激やその処理によって現れる事象関連電位 (Event-Related Potentials: ERPs) を用いる。Na ら (2010) は、性格が記述された人物の写真とその後に呈示される性格特性語の対応性バイアスにおいて、N400 による文化差を見いだしている。自己関連情報について、Fields (2012) は、アメリカ人を対象とし、自己と他者の関連情報と正負中立の感情情報との関連について、事象関連電位波形、LPP を同定した。この LPP とは、実験参加者が予期していない情報に出くわした際に、その事象の発生からおよそ 500~800 ミリ秒後に出現する陽性脳電位であり、個人にとってその情報のインパクトが大きいほど、LPP の振幅の程度も大きくなる。自己を高く見積もる自己高揚傾向の強いアメリカ人にとって、正の自己関連情報はより重要な情報であり、LPP の振幅が大きくなるのに対し、日本人においては自己批判傾向が強く、負の自己関連情報はより重要な情報であり、LPP の振幅が大きくなると予想される。

方 法

研究協力者

日本人大学生 19 名 (男性 9 名/女性 10 名) (平均年齢 = 19.89)

実験課題

実験刺激として、Fields (2012) が用いた自己関連情報と感情価との関連をみる談話課題を用いる。課題となる状況は、北山ら (1997) の状況サンプリング研究で用いられた日米の男女の成功失敗状況から 40 を選択し、日米で同等の刺激文を作成した。それぞれの状況を自己が主語となる 2 つの文章によ

って構成し、第 1 文はその状況を示す内容を提示し、第 2 文ではその結末が、自尊感情が高まる正の情報あるいは自尊感情が低まる負の情報を示す内容を提示する。第 1 文では全文が提示され、第 2 文は意味で区切られた文節が 100 ミリ秒ごとに提示される。実験デザインは、主人公が自己であり、第 2 文の最後の文節が正の情報あるいは負の情報の 2 条件 (正の情報、負の情報) を 40 パターン用意し、全 80 試行からなる。行動指標として、第 2 文の提示後、自尊感情の変化を 1~7 の 7 件法で判断させた。

表 1: 実験刺激文の例

正の感情価	負の感情価
試験の後、あなたに結果が返されました。あなたの成績は/ 最高点 でした。	試験の後、あなたに結果が返されました。あなたの成績は/ 最低点 でした。

*下線部は標的刺激

脳指標の測定

脳波計 (BioSemi ActiveTwo) と、国際 10-20 法に基づいた 32 チャンネル用の脳波測定キャップを装着し、脳波を測定した。

自己報告

実験開始後に自尊感情尺度、相互独立の一相互協調的自己観尺度、PHQ-9 日本語版、社会的不安尺度への回答を求めた。

結果

予測通り、LPP においては、負の自己関連情報において、より大きな振幅の程度が見られた。この結果は、これまでの文化心理学研究から明らかになった日本人の自己関連情報のバイアスが負の自己関連情報に重きを置くことが、脳指標においてもみられることを示唆するものである。

考察

今後、他者が主人公となる条件、またアメリカで同様にとられたデータと比較し、自己バイアスの文化的基盤がどのレベルで生じているか、検討していくこととする。

文献

- Fields, E. & Kuperberg, G. (2012). It's All About You: An ERP Study of Emotion and Self-Relevance in Discourse. *NeuroImage*, 62, 562-574.
- Heine, S. J., & Lehman, D. R. (1995). Cultural variation in unrealistic optimism: Does the West feel more invulnerable than the East? *Journal of Personality and Social Psychology*, 68, 595-607.
- 唐澤真弓 (1998) 自己認識の文化的基盤—日本における自己批判と他者高揚— 白百合女子大学 博士論文 乙第一号
- Kitayama, S., Markus, H., Matsumoto, H., & Norasakkunkit, V. (1997). Individual and collective processes in the construction of the self. *Self-enhancement in the United States and self-criticism in Japan*. *Journal of Personality and Social Psychology*, 72, 1245-1267.
- Markus, H. R., Mullaney, P., & Kitayama, S. (1997). Selfways: Diversity in modes of cultural participation. In U. Neisser & D. J. J. (Eds.), *The conceptual self in context: Culture, experience, self-understanding* (pp.13-61). Cambridge University Press.

【付記】

「文化と自己認識—文化神経科学からのアプローチ」科学研究費 (C) 26380855 唐澤真弓の一部として行われた。